魔法学校優等生

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法学校優等生

【Ｎコード】
Ｎ６８１６Ｔ

【作者名】
りんか

【あらすじ】
サイエンスワールドとマジカルワールド。これらの世界はちがうようでちがわなかった。魔法なんてないというサイエンスワールド。科学なんて魔法があればいらないというマジカルワールド。この考え方がまるっきり違う２つの世界を行き来する少年がいた。１人の少年（作者女だけど）が贈るマジカル＆サイエンスコメディー！！

キャラ紹介

登場人物（舞台）

上条　学

１年Ｂ組。男。１２歳。科学一家に長男として生まれ、上条中の後継ぎとして期待されていたが、科学オンチなことが発覚。それも、ペーパーテストは０点しかとったことがなく、実験でも毎回なにか壊すか負傷者を出す。しかも、３回に１回強烈な毒ガスを出す。それがどんなに安全な薬品であってもである。家族は、学以外天才とうたわれる者ばかり。なかでも、弟は２１世紀のエジソンと呼ばれている。勉強は、体育と非科学（魔法など）以外オール１。２つのみオール５。性格はよく、容姿もまあまあなので、モテる。お坊ちゃま。運が悪い。寮暮らし。

私立上条科学大学附属中学校（上条中）

学の祖父「上条　勉」創設。現在は学の父「上条　真」が校長。今年創立６０周年で、お祭りモード。真は、学が問題を起こす（わざとじゃないけど）ので、学校を建て直すはめになった。ただ、金はガッポリあったので経営には全く問題なかった。

王立魔法大学附属中学校（附属中）

創立１５７周年のけっこう最近できた学校。他の学校は、創立１００００年レベルなので、附属中は５歳ぐらいということ。現在「黒木　遼」が校長。３２代目。

福岡　翔

上条中の生徒で学＆咲と仲がいい。同じクラス。男。サラリーマン一家に生まれたが、父の「オレみたいな人生歩まないで」との一言

で、金かかるけどこの学校に入学。成績はすべて平均よりちょっと上。オール3。ゲームの腕は素晴らしく、彼の右にでるものは宇宙・過去・未来をめぐってもいないとまでいわれる。学と同じ部屋に住んでいる。寮暮らし。

金子　咲
上条中の生徒で学&翔と仲がいい。同じクラス。女。オカルト大好き一家に生まれ、本人も大好き。サイエンスワールドには魔法学校が無いため、しょうがなくここに入った。それのおかげで科学にも目覚めた。成績は非科学以外オール4。非科学はもちろん5。金が大好きで世界で今一番好きな人は「福沢　諭吉」。寮暮らし。運がいい。

黒木　遼
附属中校長。35歳。独身。男。魔力はとてつもなくある。サイエンスワールドの生活に興味があり、ことあるごとに学から聞き出そうとする。左利き。

トム・エドワード
附属中の生徒。学と仲がよくなる。魔法は苦手。科学は得意。男。運動も苦手。インテリ系。モテる。パソコン常備。メガネをかけている。極度の近視。

ベル・ジャクソン
附属中の生徒。学と仲がよくなる。魔法の腕はそこそこ。科学大好き。女。運動神経はいい。制服を着ているとき以外はいつも白衣を着ている。

じいさん
学がマジカルワールドに飛ばされるときになんかでてきたじいさん。

名前は不明。ローブを着ている。メガネ。こちらはただの老眼。飛ばされたあともたびたび夢にでてきて学を助けた。

キャラ紹介（後書き）

さあ、はじまりましたよ、小説。っていってもキャラ紹介だけなんですけど。えへへ。
私はまだ初心者なので誤字・脱字のパラダイスでしょうが、温かく指摘していただけたらうれしいです。
ここで、キャラの裏話でもします。したいんです。１つ目。咲の諭吉さん好きは私も大好きなのでそうさせていただきました。２つ目。遼の左利きの設定。これは、わかるひとならわかるかもしれません。なぜって？　私、左利きですから。いれたかったんですよ～。なんか。
と、いうことで私のバカらしい話に最後までつきあってください、ありがとうございました。
それでは、またこんど。

プロローグ

あぁ、眠い……。
しかも、目覚ましうるっせぇな、もう～。
って、オレ牛か！
という、典型的なツッコミはおいといて。
そういや、今何時だ？　もしや、二度寝可能！？
あーよかったー。まだ7時55分だわ。ムチャクチャ余裕。よし。
寝るか。
……。
ん？　待てよ？　今日は4月7日。ってことは今日からオレ中学生だっけ？　登校時間変わっちゃった系？
「うん、そうだね。」
頭のなかから、よくあるいい自分みたいな天使の格好をしてるオレの声が聞こえた。
ダァ～～～～！　ヤバ！　2つの意味で。
でも、あと5分で出ないと遅刻する！

はぁー、桜が満開です～。
って、オレお花見してる場合じゃないよ？
あと、もうすぐで学校が見えるはず。
早くしないと。
オレ、入学最初の日から遅刻なんてヤダよ？
まぁ、オレは成績悪いからあんまり関係ないってみんなにいわれるけど、関係ありありなんだよ。
小学校のときは、母さんに半殺しにされるかとおもった。
あー、恐ろしい。

といってるあいまに、学校に着いた。
ほんとよかった。
けど、オレにはもうひとつ大事なミッションがある。
それは、教室にたどりつくこと！
でも、クラス発表の紙どこ？
もしかして、オレ迷子？
ってか、今何時？
「あんた、腕時計は？」
へ？　……、あった。
ちょっと、オレは今マジでショックなんですけど！　腕時計あったのに、「今何時？」って。しかも、大声で独り言をいう癖発覚。
「学、あんた大丈夫？　けど、急ぐよ！　翔も待ってることだし。」
あ、あぁ。でも、あれ？　オレって遅刻してるんじゃないの？
でも、咲がいるってことは、オレ遅刻してないってことか？　よっしゃー！！
「はいはい、勝手にうかれない。大遅刻です。あたしは、先生に呼んで来いっていわれただけ。」
あ、な～んだ。なるほどなるほど。
……、やっぱりオレは遅刻常習犯か。
「学、あんたはほんとある意味素晴らしい。幼稚園も、小学校も、大事な行事のときはいつも遅刻だもんね。それも、この前も小学校の卒業式で遅刻したばっかりなのに。でも、わざとじゃない。ほんとすごい。見習いたいくらい。こんなんになりたいってことじゃないけど。」
それをいうなって、咲。耳にたこができる。
「耳に動物のタコはできません。タコは海にいて、８本足で泳いで暮らしているの。そんなこともわかんないの？」
いや、あのタコじゃないから。たこっていうのは、ある部分に急激な負荷がかかって、その部分がプクーってふくらんでいるかんじ。だとおもいます。間違ってたらすいません。

「そんなことはどうでもいいの！　それより、教室見えてきたよ！
学は1年B組。あたしも翔も同じ。」
よっしゃ！　2人が同じでよかった。
ま、今はそんなことより教室にいるセンコーにいい言い訳を考えないと。
けど、毎度毎度オレ遅刻するから、こういうのは得意だ。
あ、翔がいた。今年も隣になれなかった。まあ、「上条」と「福岡」だと番号順で座っても隣になる確率低いけど。
反対に、咲は「金子」だからいつもオレの前に座る。
オレも、少しは周りがＮｅｗ　ｆａｃｉ（ニューフェイス）になってほしいよ。毎年毎年こうなんだから。
「おい、上条　学。大遅刻だ。」
あー、きたよ。センコーの説教。
「ま、オレもそうだったんだけど。ってことで無罪放免、大丈夫だ！」
え？　説教なし？　やったーーーーー！
そういやハリウッド映画で「ヤッターーーーー！」ってセリフあったよな。
「みんな、もうすぐ入学式だ。ホールに行くぞ。あ、そだ。オレの名前いうの忘れてた。」
みんないっせいにコケた。こんな教師見たことない。1人を除いて。
「オレの名前は、上条　真。この学校の校長だ！」
みんな、仰天。一部のヤツは変な顔して止まってる。
えー、父さんなのか？　校長がこんなことしてるぞ？　普通は今頃入学式の準備だろ。教師足りないのか？
「何みんな止まってんだ？　早くホール行かないと入学式に間に合わないぞ。」
みんなその言葉で再生した。今まで一時停止状態だったのか？
オレは、もう遅刻したくないので、早くホールに行った。

プロローグ（後書き）

いやぁ～、終わりました。
では、毎度おなじみ（やったの1回だけなんだけど）裏話です。1つ目。学がたこについて「間違ってたらすいません。」ってとこ、私のセリフです。確かこうだったよなって感じで打ったので。「ちゃんと調べろや。」って方、すいません。2つ目。これまた学が名前をいうのを忘れた教師にむかっておもったときにでた「1人を除いて。」これは、上条　真のことです。
てなわけで、今回はこれで終わりです。誤字・脱字ありましたらお知らせください。

第1章　事件の幕開け

はぁ、メンドくせぇ。
なんで入学式ってあるんだ？　意味があんのか？　え？
クソメンドいし。
メンドいって3行しかないのに何回いってんだ、オレ。
「御起立願います。」
ガタッ。みんな一斉に立った。
しょうがねぇ。立つか。
よっこらしょっと。オレは、このセリフを心のなかでいったはずだった。なのに、なんかみんなに笑われた。
また、大声で独り言をいう癖が発動した。
うーん、オレはこの癖を直したほうがいいのか？
「一同、礼。」
みんなはちゃんとおじぎをしたけど、オレはピョコっと軽く頭をさげただけだった。
オレが入学式とかを嫌いなのは、校長とかの長ーい話があるからだ。それが無ければ、まだマシになるんだけどな。

「御起立願います。」
あぁ、やっと終わった。
眠い。そーいや、オレどうやって入学式のあいだ時間を過ごしていたんだろう。
寝てたのか？
そんなことはどーでもいいな。

それより、はやく教室に行かないと。
最初、１０秒ぐらいは黙って（ボーッとしていた）歩いていたが、オレは重要なことを忘れていた。
友達をつくることだ。
あのときは気付かなかったが、クラスに知ってるヤツが翔と咲しかいない。
ピーンチ！
よく小学校のときに実験で４人グループになった。ってことは、中学校でもあるものなのか？
そのときグループが知らない人だったらみんな恥ずかしがって実験が上手く進まない。
実験をやったらピカ１で爆発させることができるオレは、余計評価がさがる。
そうしたら、７月の終わり頃、オレは生きているのだろうか。母さんに殺されている気がする。
そんなことを連想しているあいだにも、時は過ぎていた。
はやく話しかけないと。
オレは、隣にいた男に話しかけた。
「オレは上条　学。学って呼んでくれ。お前の名前は？」
「僕は、佐藤　平太郎。あだなは平太だよ。よろしくね。」
こんな感じで、いろんなヤツに話しかけた。
教室についてから気付いたんだが、このホールから教室に帰るまでの短時間で、クラス全員に話しかけたらしい。
ある意味すごくないか？
そんなこんなで、オレは輪の中心になった。
オレは、人気者だ。フフフ。
いかん。嬉しすぎてにやけた。

はぁ、やっと終わった。
って言っても、明日からさっそく授業あるんだけど。
テンションさがるわー。
そういや、教科書のリストをもらったんだ。
これ、かなり前にもらったんだよな。
はやく本屋に行かないと売り切れる！
えーと、教科書はっと。
「物理学」・「化学」・「生物学」・「地学」か。
けっこう高いな、おい。１冊１５００円～２０００円だぞ！
オレのお財布事情が……。
って母さんに言えば金くれるんだけど。
しかも、ノートとかも買わなきゃいかん。
一番近い本屋はっと。
ケータイのＧＰＳってほんと便利だ。方向オンチのオレとしては感動モノ。
「本田書店」か。ここから３ｋｍか。けっこう近いな。バスで行くか。
そうしてオレは、バス停を探しに行った。それが、大変な事件の幕開けとなることも知らずに……。

第1章　事件の幕開け（後書き）

終わりましたー。今回は大変でしたよ。イメージがわかなくって。でも頑張りました。
私最近「ハリー・ポッター」シリーズと「とある魔術の禁書目録」シリーズにはまりました。なので、地の文がそれっぽくなってるところがあるとおもいますね。
今回、最後カッコよくキメさせていただきました。サブタイトルもそうですね。これも、影響がきています。
最後自分がかいたのを読んだとき、これはちょっと一人称じゃないなと感じました。これはしばらく続きそうです（汗）。
あと、読者で私の親友Yに「りんか、小説読みにくいから行間1行あけて。」といわれました。読みにくいですか？　ご意見お願いします。私的には、別に気になりませんが。
ご意見がきたら、Yにいってやります。Y、待ってろよ！！

第2章　学、じいさんに出会う

バス停♪　バス停ー♪

なぜ、オレはバス停でこんなにテンション上がってんだ。たかが、バスに乗って本屋に行くだけだろーが。

お、あったぞ。バッス停ー♪

ありゃ？　あの変な格好してるじいさんは誰だ？　あれは、ローブってヤツか。どこで売ってんだ？　買いてぇ～。

うぉー！　あのじいさん、こっち向いたー！　ガン見してんのバレた？　ガン飛ばしてるっておもわれた？　あんな格好してんだから、中身もおかしいに違いない。ヤバくねぇか？　オレ？

しかもこっちキターー！

「君、名前は上条　学でいいかね？」

話しかけてきた！　なぜか名前知ってるし！　怖っ！

「まぁ、そうだけど。」

このとき、タイミングよくバスがきた。だから、じいさんについてこられないように、速効で1番後ろのはじっこに行った。

なのに、じいさんも高速でオレについてくる。

もうこのじいさん、怖すぎる。

しばらくしてから、バスが動き出した。

そしたら、このじいさんずっと魔界やらなんやらの話をしてくる。ずっとだ。

こうなると、あんまりキレないオレでもイラついてきた。

「あの。」

よく見ると、かなり変な格好だ。

モジャモジャのすっげぇ長い髪で白髪頭。けっこう分厚いメガネをかけている。口ヒゲもけっこう、いや、すごく長い。しかも、特徴的なことは全部１００歳越えじいさん条件なのに、顔とか体つきとかがすごく若い。６０歳くらいだろうか？　ともかく元気そうだ

な。
「魔界のなんのって、ここ科学の世界ですけど？　でも、こんなことばっかりいってるってことは、じいさんオカルト好きってことか？　ともかく、オレ急いでるんだ。話相手なら他をあたってくれ。」
「まぁまぁ、そんなことをいうでない。これは君の将来に深く関わることじゃ。それより、最初の君の質問に答えよう。オカルト好きか？　ってことだが。まぁ、好きっていうか、そんなとこじゃろう。」
君の将来に深く関わる？　どういうことだ？　オレは、将来上条学園の理事長になって、いろいろ書類にハンコを押すだけの人生を歩むんじゃないのか？
「いや、違う。じゃが、今ここでいうのは気が引ける。まぁいずれ、自分のやるべきことが、わかるじゃろう。近いうちにな。ところでおぬし、魔法は好きかの？」
魔法という単語で、オレの血が沸騰してきた。
「大好きなんだ！　オレ、勉強はからっきしダメだけど、非科学と体育はオール5で成績優秀なんだ！」
バスのなかで叫べる最高レベルの音量でいった。
「そうかいそうかい。」
じいさんは、温かい目でオレを見つめていた。まるで、やっと見つけた。とでもいいたげに。
「学、わしはこういう子を探していたんじゃ。君は魔界にくる勇気があるかの？　魔界といっても本来はマジカルワールドというんじゃが。魔界に行ったら大変なことが起きるかもしれない。下手したらここには戻れないかもしれない。それでも学は魔界にくるか？」
なんだ？　いきなり。オレが魔界に行こうとしてるみたいじゃないか。
「よく考えてみるといい。」
プシュー。バスが止まる音だ。
じいさんが、バスから降りようとする。

「じいさん、名前くらい教えてくれないか？　アンタがオレの名前を知ってるってことはオレたち知り合いなのか？」
じいさんは、微笑みながらいう。
「学、それは今度にしよう。」
偶然バス停で会っただけなのに。
「学、わしはおまえを待っている。いつまでもな。それまで、名前の件はおあずけじゃ。」
じいさんは、笑顔で行った。
その背中は、また会えるといっていた。

第2章　学、じいさんに出会う（後書き）

今回もシリアス系です。ヤバい、前回同様に影響がきてます。このままいっそ三人称にしちゃおうかな。次作品かくときは三人称にするかもデス。

今回予想よりもシリアスになりすぎました。特に、最後らへん。三人称ですね。一人称のはずなんですけど……。

業務連絡？　です。

前、親友Yとかきましたが、その後Yアカウント登録したようです。ユーザーネームは愛福。作品名は「退屈と、出会った彼女」です。愛福は小説初トライらしいので生温かい目でみてやってください。

まぁ、ヒマがあったらで。けっこうおもしろいとおもいます。

第3章　学、本屋で迷子になる

あのあと、オレは本田書店前で降りた。店の名前がバス停の名前になってるってすごくないか？

でもあのじいさんはなんだったんだ……？　また会えるって？

うーん。考えてもしょうがないか！！　夢だ夢！

でも、じいさんの目はマジだった。しかも、オレの名前知ってたし。不思議だ。

不思議なできごとが起きるのが夢なんだろうけどな。

ま、忘れるか。

「学ー！！」

キャー、助けてー、ウルトラマーン！！　バルタン星人が来たー！！

「誰がバルタン星人じゃ！？　なぜにウルトラマン！？　このあたしがあの怪物にでも見えると。……そうか、まずはコイツの目を覚まさないとなぁ？」

咲が、指をパキパキ鳴らし始めた。

逃げなければ殺されるます。隊長、家の母さん並の敵を見つけました。絶対絶命です。でも、指太くなるぞ、もともと太いけど。

「失礼な！？　このときに及んでまでケンカを売るか貴様は！　隊長って誰だよっ。誰に向かって言ってるんだ！　死にたいのかアンタは！」

うん、そうです。っていうバカがいるか、え？

そうして、バルタン星人の待ちやがれー！　毒ガス男！！　という絶叫とともに、走り出した。発狂に近いかも。うん、これは発狂だ。

と、そこに人生最大のグットタイミングでウルトラマン翔が登場。たぶんオレは、人生の運を全部使い果たしたとおもう。これから死んでもおかしくないだろう。

オレはウルトラマンを盾的なかんじにして、バルタン星人の攻撃を止めた。我ながらいい策だ。
「学、今日はこれぐらいにしてやる。今度は覚悟しておけ。」
バルタン星人の殺し屋の目。だけど、すぐにいつものかんじに戻った。
ふぅー、助かったー。
ん？　あれ？　オレどのくらい走ったんだ？　けっこう走ったよな。さっきバス停から降りて、ちょっと考え事して、で直線でスッゲー走ったんだ。バス停が入口のまん前だったから、かなり通りすぎたな。
そう、考えながら横をチラッと見た。そこに、あった建物は？　2人とも、オレと一斉に横を見たようだ。そして3人、口があんぐり。そこにあった建物は、本田書店だったからだ。
広すぎないか？　この本屋。呪いがかかっているんじゃないのか？　まあいいか。建物がデッカくて、中にある本がスッカラカン。なーんてこともないだろうに。
そういって、本屋に入ったは良かった。無事に、本屋に辿りつけたんだから上出来だ。今のことが無事にはいるかどうかわからないが。
だが、やっぱりオレの不幸はおこぼれなしのようだ。
広い、広すぎる。外からじゃわからなかった。中から見るとクソひろいじゃないかよ。
「うーん、これじゃどこになにがあるかわかんねぇな。はじっこから順番に見てく？」
翔。オレはそのマイペースさに感動するぞ。はじっこからみたらこれは徹夜で丸2日かかる。
「学、アンタここになに買いにきたの？　あたしはオカルト本。翔は？」
「オレ？　オレは、ゲームの攻略本にきまってんだろ。アイテムのリストにチェックいれたいんだよなー。」

２人の好きなものですね、はい。わっかりましたー。
「どーせ、オレは買い忘れてた教科書ですよー。すっかりカバンの奥底に沈没してて舟上げしたらギリギリ文字が読めたリストを解読してきたんですよー。」
「ぷぷっ。」
笑いをこらえるな！
「あっはっはっはっは！！！！！」
やかましいわ！　そんなにウケるか普通？
２人は、まるっきり１０分間笑い転げたあと本を探しに行った。
「じゃあな、翔、咲！　終わったらレジの横で待ち合わせな！」
ラジャ！　という声を聞きオレは参考書の山へ。行こうとおもったんだが、どこにあるのかわからなーい。広すぎて地図の場所もわからなーい。
「どうしようー♪」
小声で自作の「どうしようの歌」を歌っていたら、検索するコンピューター発見。
キターーー！！　オレはパソコン系は得意ですから！
……。よし。検索完了。行きますか。
おっ。あったじゃん。って、少なっ。
まぁ、わかりますよ。参考書が売れないことも。だからって、ねぇ。他のジャンルが少なくても５００冊はあるのに、ここ１００冊って……。
うーん、ちゃんと４冊あるかしら。
いかん、混乱しすぎて女言葉になった。どうしたんだ、オレ。
あ、４冊ドまんなかにあるじゃん。そうか、上条中って金持ち学校だから教科書も自分で買えシステムで売れるんだな。
やるじゃん、本田書店。
さあて、レジへ行きますか。
お、いるいる。２人とももう終わってたんだ。
「合計で７０００円になります。」

財布、財布っと。ギリギリだ。余り５００円か。よいしょっと。
チャリーン。
え？　今の高速で走りぬけていった物体はなんですか？
ってか５００円がない！　消えている！　またか！
「フフフフ。この５００円玉はもらった。」
咲、やめなさい。それはオレの５００円。
「あたしのお金はあたしのもの。落ちてるお金もあたしのもの。」
なんだ、そのジャイアン思考は！！
「もういい、５００円ぐらいくれてやる、といいたいところだがそれがないとオレは歩いて家まで帰らんといけなくなる。」
「いいじゃん、歩いて帰れば？　運動不足解消ってことで。」
運動不足じゃないから！　オレ、サッカーを部活で毎日やってますからね。むしろ運動過剰なんですけど！
「お客様、後ろに並んでいられる方がたくさんいますので早くしていただけますか？」
あぁっ。すいません。
しょうがねーなー。あとで５００円取り戻すか。
「ありがとうございました。またおこしください。」
もうとうぶんこねぇな。
うーん、なんか忘れてる気がするんだけどなぁ。……そうだ、５００円！
「ねぇ、それのことなんだけど学。これマジでもらっていい？」
よくねぇから。
「ちぇーっ。じゃいいや。」
なんか戻ってきたーーー！！　こんなにすんなり戻ってきていいのか！？
「そのかわり、今度ハンバーガーセットおごって。」
うっ。そうきたか。
「でもさぁ、咲。おまえん家も金持ちだろ？　こんなに金が大好きってレアだぞ？」

「だって、家それで金持ちなんだもん。家の資産どれくらいあるとおもってんの？　ピーーーー（いえないよ！　ｂｙ作者）億円だよ。」
「ヒー。咲、それ一部を家にくれないかなぁ。家、サラリー一家だし。大変なんだよね。」
「あげるかっつの。家の金好きを知らないとはいわせん。しかも今いったばっかだし。」
おい、バス停あるぞ。おまえらバスで帰るんじゃないのか？
「あ、そうだった！！」
おい。忘れてたのか。
「おーい、バスきたぞ。乗るぞー。」

第3章　学、本屋で迷子になる（後書き）

増えました、文字数。どんどん妄想が膨らみますね。
今回は、翔と咲がでてきました。サブがでてくることでウケを狙うことも可能になりました。
最近は期末の影響で学校の図書館が貸出しないんで影響は少ないです。
そういや、大発見したんですよ！　学校の図書館に端っこですけどオカルト本が！！
しかも、魔女狩りとかミイラの秘密とか！！　感動～～。
それでは、また今度ですー。

第４章　学、ビリーに妨害される

あー、よく寝た。
今日は４月８日、入学式の次の日。今日から授業はじまるんでっせ。
こんなにはやく授業はじまるなんてね……。
「みんなー、早くしないと遅刻するよー。今何時だとおもってんの？　７時５５分！」
ん？　あの声は寮のおばさん。えーと、あだ名なんだっけ？　そうだ、ビリーだ。
って、またオレ寝坊した！　ヤバス、ヤバス！！
それにしてもビリー、のんびりした声で遅刻ギリギリの時間をいうんだなー。だからビリーなのか。なるほどなるほど。
「学ー、翔様と咲様が来てやったぞ。感謝しやがれ。」
上から目線やめなさーい！
そう、オレは窓から叫んだ。
そしたら、
「おまえのほうが上から目線じゃ！」
とのこと。
そんなことねぇとおもうけどなぁ。
「はやくせい！」
「はいはい、早く行きますよー。」
階段を降りた。そしたらビリー。
「学、朝ごはんは？」
「ビ、ビリー。オレ、今急いでるんだ。はやくしないと遅刻するんだが。」
「それは寝坊したおまえが悪い。さぁ、朝ごはんを食え。」
ビリーにむりやりイスに座らされて朝ごはんを食わされた。外からは催促する翔＆咲の声。

ビリー、キレると人格変わるんだな。口が悪くなる&のんびりした声じゃない。
「よろしい。いってらっしゃい。」
も、戻った。なんだったんだ、今のは。
今度こそ玄関に向かった。玄関をでたら非難の嵐。案の定、責められました。
「だってさ、ビリーが玄関の前でさ……。」
オレは今あったことを2人に説明した。
「なるほどね。じゃあ、そのビリーが立ちふさがったから遅くなったわけと。」
そうだ、咲。
「それは寝坊したおまえが悪い。」
ビリーとまったくおんなじこといってやがる！
「翔、おまえはわかってくれるよな。」
「それは寝坊したおまえが悪い。」
うぉーい！　おまえまでもか！？
「それは4月になってからの一週間、男はみんな経験したはずだ。それは百も承知だとおもってたんだけどな。」
いや、オレは経験しなかったぞ。
「あれ、昨日はビリーいなかったのか？」
「うん。いなかったし、まいっかぁ。ってことで。」
「着いたよ、学校。はやくしないとチャイムなっちゃう。」
あ、そうだった。はやくしねぇと！！
ギリセーフ。
キーンコーンカーンコーン。
あ、担任だ。
「今日も全員いるなー。いいぞ、いいぞ。この調子で！年間欠席ナッシングでいくぞー。」
あいかわらずゆるい。しかも、ナッシングって。
授業の説明がはじまった。

「ここは、基本的にオール科学の授業だ。好きなヤツには天国だろうな。教科ごとに先生がいてオレは物理学専攻だ。それぞれの先生はそのときまでお楽しみってことで。1日基本5〜6時間。部活入りたいヤツは今度説明会があるからそんときな。ま、こんなかんじだ。なんか質問あるか？」

何個か質問がでた。

「ついでに、校長から伝言なんだが、家の学は実験で毎回、物を壊すか負傷者を出す。みんな上手くよけてくれ。っていうのと、3回に1回は学はどんなに安全な薬品でも毒ガスをだすからキミたちに酸素ボンベを渡す。気をつけてくれ。とのことだ。では、おねがいします。」

業者の人が教室にはいってきた。デッカイ箱を何個かもっている。

とおもったら、酸素ボンベを配りだした。

「実験があるときは絶対もってくるんだ。忘れると死ぬぞ。」

なんかすいません。オレ、謝罪したくなってきた。

ん？　あと10分で授業がはじまる。うーん、楽しみじゃないなぁ。

第４章　学、ビリーに妨害される（後書き）

づ、づがれだー。暑いよー。もともと住んでるとこって蒸し暑いって有名なんですけど、パソコンの前ってもっと暑いです。
期末、終わりましたけど、部活に行くようになりましたから、キツいです。期末ヤバかったんですよー。暗記ボロッボロ。保健は死にました。順位はきっとビリでしょう。
大変だったんで、活動報告でおなじみのＳちゃんとショッピングしました。詳しくは活動報告で。

第5章　やっと授業やります

「きりーつ。これからー、1時間目のー、物理学のー、授業をー、始めまーす。れーい。」
「おねがいしまーす。」
たるい。たるいぞ。特に日直。「ー」がすっげぇ多い。
ま、オレも「おねがいしまーす。」といったたるいヤツの一員なんだけど。
「今日は「物理学について」を勉強する。黒板にかくから、がんばって写せよ。」
みんな、「ヴェーーーーー。」と、うめく。
「えー。」じゃないんだな。なぜ、「ヴェーーーーー。」なんだ。
担任、えっとなんだっけ、名前。の黒板を写す。

物理学とは

・物理学（ｐｈｙｓｉｃｓ）とは、自然科学の1分野。
・自然界に見られる現象には、人間の恣意的な解釈に依らない普遍的な法則があると考える。
・自然界の現象とその性質を、物質とその間に働く相互作用によって理解すること（力学的理解）と、物質をより基本的な要素に還元して理解すること（原子論的理解）が目的。
・化学、生物学、地学などほかの自然科学に比べ数学との親和性が非常に強い。
・古代ギリシアの自然学　（φ?σι?　ｐｈｙｓｉｓ）　にその源がある。

・「ｐｈｙｓｉｃｓ」という言葉も、元々は自然についての一般的な知識の追求を意味していて、天体現象から生物現象までを含む幅広い概念だった。
・現在の、物理現象のみを追求する「ｐｈｙｓｉｃｓ」として自然哲学から独立した意味を持つようになったのは１９世紀から。
・物理学の古典的な研究分野は、物体の運動、光と色彩、音響、電気と磁気、熱、波動、天体の諸現象（物理現象）。

「わっかんないことあるかー。わかんないなら質問！！」
意外にも、日本語とギリシア語の質問だ。みんな小学校で、科学以外のことは大学院卒業レベルまでいったはずなんだけど。勉強し直さないといけないかもな。
メンドいから、まとめる。

・恣意（しい）とは、（１）その時々の気ままな思いつき。自分勝手な考え。（２）物事の関係が偶然的であること。
・普遍とは、いつ、どこで、変わることなく誰にでも当てはまること。真理。
・φ？σι？は、ギリシア語で自然を意味する。

さすがに、科学のことはないみたいだ。
「今日のやることは終わりだ。うーん、あと１５分もあるな。ほんじゃ、みんな寝ていいぞ！！　寝ると、今勉強したことが脳にインプットされるんだ。さぁ、みんな寝るんだ！！」

おいおいおい。そんなことってあんのか？
「寝れなかったら、他んことしていい？」
後ろのほうからだ。
「ま、別にいっか。限度は考えろよ。あと、席を立つのもダメだ。それを守れば、なんでもどうぞ。」
「オッシャーーーー！！！！！」
とみんなの雄叫び。おまえらは獰猛な獣か。
オレは、周りの席のヤツらと部活について話すことにした。６人が限度だ。それ以上は遠くて話せない。
「確か、この学校は、男が野球・サッカー・硬式テニス・例外でバスケ・ピアノが弾けるヤツのみ合唱、女が軟式テニス・合唱・ソフトボール・バスケ。男女が卓球・美術・１年は募集してないが英会話ってとこか。」
とオレ。
「野球はなにかは知らないけど、なにかに入ってると、入部できないんだって。Ａ組の海斗がいってた。海斗っていうのは、あたしと学がいってた小学校出身の井口　海斗っていう人。英会話は去年あんまり人が集まんなかったからあたしたちが３年になったら廃部決定。」
さっすが咲。情報力ハンパないなぁ。
「でっしょー。さぁ、あたしを敬え、学。」
誰がおまえを敬う。
「なんですって～？」
「まあまあまあまあ。押さえよう、咲ちゃん。」
ナイス、裕子。あなたのおかげでオレは寿命が１００年延びた気がします。
「オレは、野球に入ろっかなぁ。」
「私は軟式テニス。」
咲はどうするんだ？
「あたし入んない。」

みんなビックリ。
そこで、チャイムがなった。

第5章　やっと授業やります（後書き）

今回は、やっと科学モノらしく知識が炸裂いたしました。
なんか今回は親の妨害を受けつつ、やりました。
もうすぐパソ禁でそうです。
危ないんで、はやくきります。
ではでは～。

第６章　学、部活説明会に行く（前書き）

今日（２０１１年７月１７日）は、家族と遊びに行きました。なので、ちょーっと遅れちゃいました。
申し訳ございません＞ｍ（＿＿）ｍ＜

第6章　学、部活説明会に行く

はぁ～、やっと2日目が終わった。疲れたなぁー。

「みんなー。これから部活説明会あるから入りたいヤツは残ること！　残んないと入部届けもらえないし、部活情報もわかんないから損するぞー。」

いや、入部届けもらえなかったら大変困るとおもいますけど。損するレベル超えてるよね？

「これから、帰りの会をはじめます！」

学代、学級代表だ。小学校では、学級委員っていってたんだけどなんか変わってた。

学代って学（がく）って人が大きくなったって感じしねぇか？

そんなことを考えてたら、「起立！」と学代がいっていた。

「これから、部活説明会をはじめます。」

あれは、野田先生だ。あの先生、なんか授業もやってないっぽいし、校務主任か？　とオレは勝手に想像を働かす。

まぁ、オレはサッカー部に入るわけだし、説明聞かなくてもいいや。といいつつ、耳をビンビンとアンテナのように伸ばすオレ。

「最初に、プリントを配ります。」

あ、プリントがきた。

なになに、サッカー部の顧問はっと。へー、伊野先生・藤野先生・川田先生か。キャプテンは梅田くん。川田先生は1年C組の先生で知ってるけど、あとは知らない。

ここからは、川田先生にバトンタッチだ。ま、説明なんて聞かな

いけど。あくまで言い続けるぞオレは。
プリントはこうだった。

平成２３年度　部活動の取り決め　　Ｈ２３年４月　私立上条科学大学附属中学校

○　目標・目的
「挨拶と返事のできる部を創ろう！」
「同じ目標を持った仲間との活動を通して、キャプテン・上級生を中心とした、まとまりのある部を築いていこう！」
「”学校の代表者”として自覚ある行動がとれるようになろう！」

○　活動日　　月曜日～金曜日（土・日曜日・祝日に活動する部活動もあります）
日曜日の午前は、原則的に地域スポーツセンターが使用します。

○　開始時間　　★限られた時間を有効に使うこと！　特に開始時間を早く。
授業終了時刻の３０分後をめどに開始！！
例　Ａ帯６時間の日は、３：１５に授業が終わります。
その日は、３：４５に開始できるようにしましょう。
Ｂ帯６時間の日は、２：４５に授業が終わります。
その日は、３：１５に開始できるようにしましょう。

○　終了時間　　３～１１月　　午後６時３０分までに終了
１１～２月　　午後６時までに終了
※　朝練習は、必要に応じて行います。
※　時間延長も、活動上必要に応じて行います。

○　下校時刻　　★　活動終了後から１５分後には下校する。（門を出る。）
★　下校後は、寄り道や話しこんで下校が遅くならないようにする。
★　日没後は、できるだけ２人以上で下校すること。

○　部名・顧問・部長
☆　新たに部員を募集する部活動
★　新たに部員を募集しない部活動

☆　軟式テニス　　女子　　野田先生・藤田コーチ
高田さん
☆　硬式テニス　　男子　　菊田先生・浅田コーチ
早田くん
☆　サッカー　　男子　　伊野先生・藤野先生・川田先生　　梅田くん
☆　ソフトボール　　女子　　博田先生
福田さん
☆　バスケットボール　　女子　　城田先生
宇野さん
☆　卓球　　男女　　藤田先生・田所先生

藤野くん・木俣さん

☆ 美術　男女　余合先生

内田くん

☆ 野球　男子　鈴木先生・岡田先生・藤田コーチ　大井くん

☆ 合唱　女子・（男子）　園田先生

坂田さん

★ 英会話　男女　坂上先生

日高さん

○ 活動時の服装について

☆ 練習・試合中の服装

● 学校指定の体操服、ジャージ、白のワンポイントTシャツ

● 部で顧問が認めた服装

例：野球部の練習着・短パン・ユニフォーム・ジャージ・トレーナーなど

☆ 登下校時の服装（上条中の生徒と分かる格好で登下校する。）

● 制服

● 練習に準じた服装（顧問の認めた服装で、勝手な服装で登下校しない）

○ 部室について

・ 4月（9月）の部員数に応じて、部室を割り振る。

・ 部室を更衣場所以外の目的で使用しない。教科書などの私物を置いていかない。

・ 清掃については、使用している部活定期的に行い、美化に努

める。
・　カギについては、職員室でカギを受け取り、活動後返却する。（原則顧問から受け取る）その際、窓閉め、電気の消し忘れがないようにする。
「こんにちは、○○部の△△です。部室のカギを取りに来ました。失礼しました。」
※　４月当初は、グランド第１更衣室を１年生女子の更衣場所とする。

○　土日曜日・長期休養中・短縮授業中について
・　昼食については、弁当の場合は持参し、買いに出ない。ゴミが出た場合は、各自で家に持ち帰る。
・　バッグは、決められたものを使用すること。
・　他の部活動などが練習試合をしているときは、他の学校の先生や生徒に礼儀正しくあいさつをしよう。

○　その他
★　「３年間続ける。」「毎日、参加する。」
・　原則としてテスト前１週間と、テスト中は活動しない。試験終了日は活動してもよいが、健康面に留意する。
・　顧問が不在の時は、原則なしとする。
・　再登校の時は、学校に残らずすみやかに下校し、開始時間の１５分前よりも早く登校しない。
・　再登校の時の持ち物は、決められたバッグを使用すること。
・　活動は、校内の定められた場所で行う。
・　体育の授業・学活等では、部活動の服装（靴下など）は認めない。
・　活動場所・部室の清掃については、トンボがけ、モップがけ

を必ず使用している部活で行う。
・　不祥事が起こらないように、部員全員で気を配る。
（部室の利用状況・買い食い・けんか・寄り道など）
・　トイレについて　→　運動場の部活動は管理棟1階を使う。
スリッパを使用する。
※　整理整頓に努めること。

長かったー。なんか中学校って疲れるなー。規則多っ。こんなんじゃオレ、「規則病」で死にます。いや、ほんとマジで。
これって当たり前のことも書いてあるなー。そんなこと書かないといけないほどこの学校ってショボいのか？
「では、入部したいところの顧問の先生のところに集まってください。」
野田先生だ。もう、説明終わったみたいだな。ナイスタイミング！
川田先生かー。怖そうだな。う～ん？　やっぱりどうしよう？
といって入部を断念する学くんじゃないんだけど！　アハハハハ！！
「おーい、みんなー。これから、入部届けを渡す。入部するって決めてる人はいつだしてもいいけど、ちょっとでも迷ってるなら仮入部したほうがいい。決めてる人もやったほうがいいけどな。仮入部はまぁ2・3年生にいってくれればいいや。場所はクラブハウス。がんばって探してくれ。入部届けもらったら解散！」
オレはすぐ入部届けをもらった。
今日は体操服忘れたけど、明日から毎日来ようっと。入部するのは決まってますけど。
今日は翔と咲誘っていっしょに帰ろうかな。

第６章　学、部活説明会に行く（後書き）

どもども、りんかでございます。
今回も、裏話！
まず、説明ですね。Ａ帯とは、私が行ってる学校で、１時間（時限）の授業が５０分のことをいいます。Ｂ帯は、４５分です。
次です。プリントの参考にしたのは、私が本当にもらった部活説明会のプリントです。なんか残ってたんで、活用しちゃいました（笑）。
しかし、学校の名前やら、人名やら、私立ではおかしいかなー（自転車登校禁止など）ということは、もち変更です。やらないとヤバいですね（汗）。特に最初の２つが。
あと、下校のことです。上条中では、寮に住むのもいいし親といっしょに住むも良し、です。基本は反抗期＆全国から生徒が集まるので寮暮らしが９０％を超えています。
ちなみに、この前に新作「戦国時代の女将軍」を連載始めました。ヒマでヒマでしょうがなかったら見てください。

第7章　じいさんとの再会

「はい、先生、入部届け。」
「お、学～、早いじゃ～ん。そんなに意思強かったのか～。なんだよ、英会話は入る気ないのか？　オレがいるんだぜ？」
なんなんだよ、そのうぬぼれ発言は。オレがいるから絶対部員が驚くほど集まるとかおもってんな、この人。
だいたいオレ、英会話なんか入ったら黙りこくるしかないんだよ。テスト0点しかとったことないし、英語の授業は挨拶からわかんないし、ＡＢＣも書けるけど順番はＡＢＣＤＥＦＧしかわかんないし。
「おまえってなんだ、わざとやってんのか。わざと0点とってみんなの注目を浴びようとか考えてんだろ。」
オレはそんな幼稚なことは考えてません！　知ってんだろ、このまえの精神年齢テストでオレは現１２歳だがテストでは８５歳だったんだぞ！　すごいだろ！
「ある意味な。オレもビックリ。教師生活２３年目ではじめてだ。」
キーンコーンカーンコーン。朝のチャイム。最近は、このチャイムがなったら読書することになってる。
オレがもってきた本はっと。あったあった。これこれ。「呪いの藁人形の方法と真実」。
確か呪いの藁人形って、丑（うし）の刻（午前1～3時）に神社の御神木に憎い相手に見立てた藁人形を毎夜五寸釘で打ち込む、日本に古来伝わる呪術の一種なんだよな。ムフフフフ。
五寸釘っていうのは、長さが五寸（１５．１５ｃｍ）の釘のこと。実際には建築に使われることはあまりないんだ。
だから、入手するのがとても難しい。あー、オレのオカルトグッズシリーズにすっごく入れたいぜ。
「学ー、学くーん。顔がおかしいですよー。またオカルト本もってきたの？　だからこんなパーツが全部曲がってる顔になったのか。

そんなに読みたいんだったらあたしの「魔法大全」って本貸してあげようか。このまえ本田書店で買ったやつね。」
断る。それはもう読んだ。咲、おまえまだそんなの読んでんのか？　まだまだだなぁ。
「なんですってー！　これでもあたし魔法極めてんだからね！！アンタには勝てる自信がある！」
「ふーん、では第1問！　五寸釘の長さは？」
さっきのやつ。まぁ、これは前から知ってたし、基本だな。
「え？　えーっと、うーんと……。５０ｃｍ？」
へっへーん、こんなのもわかんないのか。ざまあみろ～♪
「しょうがないわね、今に見てろ！！　アンタなんか1カ月後には負かしてやるわ！！」
内心ビックリ。びっくらこいたー。これ絶対わかってるとおもったんだけどなー。なにげにオレ、天才をも超えてる？
あれ、咲ったら「うぉーーーーー！！！！！」と叫びながらオカルト本を1秒で1ページの速さで読んでいる。恐るべし、オカルトに対する執着パワー。

部活も終わったし、帰るか。あー、もう6時半か。早いなぁ。やっぱサッカーは最高だな！
「ああ。オレもそうおもうよ。」
だろだろだろ。翔、おまえもわかってんなぁ。
「あたり前田のクラッカー！」
なんだ、それ。クラッカーなんてどこにもないぞ？
「これは古いギャグ。このまえ、テレビでやってたぞ。本田書店に行く前にやってたんだ。」

ふーん、そんなのがあるのか。勉強になります。
ってあれ？　あんなとこにこのまえバスで会ったじいさんがいる。ローブを着てるからまちがえようがない。よし、ちょっくら行って名前聞いてきますか。
「翔、オレ用事があったんだ。先帰ってくれ。」
「ああ、わかった。でも、早くしないとビリーにシメられるから気を付けろよ。」
「ありがとよ！　じゃあな！」
じいさんがいるとこ、意外に遠い。見るとそうでもないんだけどな。
あ、じいさんが行っちまう。急がねぇと。
「じいさーん、ちょっと待ってくれ！　オレだってオレ、上条　学だって！」
通行人が全員こっちを見るがそんなの構わない。じいさんに追いつければなんだっていい。
だけど、じいさんは気付かない。ここは車はあまり通らない。だから、気づくはずなんだが。
普通に考えれば、歩いてるヤツに走って追いつこうとすると、体力が切れないなら追いつくはずだ。
オレは体育は超が１００個つくくらい得意だ。足だってこのまえ計ったら7秒ジャストだった。持久走も１５００ｍを４分で走った。
なのに、追いつかない。まるで、オレがカメでじいさんがウサギになったみたいだ。
なにかの力が働いてんのか？　体が重い。体全体におもりをたくさんつけられたみたいだ。
じいさんはどんどん歩いて行く。歩いているのに、オレには５０ｍ５秒の速さで走っているように見える。
じいさんが見えなくなった。しょうがない、諦めるか。
とおもった瞬間に体が軽くなった。
うっ、ヤバ！　オレの腕時計で６時４５分をきっている。オレの

腕時計は秒刻みであっているデジタル時計。それでもってカッコイイから重宝してるんだ。

じいさんは見失ったけどまた会えたらいいなぁ。今度こそ名前聞いてやる！！

第7章　じいさんとの再会（後書き）

パソ禁発動しました。今は図書館でやってます。
来週までには解禁させます。厳しいですが……。

第8章　やっと本編入ります

あー、遅刻したー。
はぁ、オレもうあきらめた。起きたの8時10分だったもんなぁ。8時10分に出て学校着くのは25分。着席が15分だから10分オーバー。
しかも、またビリーの殺気くらったし。
もう、ヤダーーーーー！！！！！！
あり？　通行人が全員こっちを見ている。恥ずかしいなぁ。そんなにオレってかっこいい？？
「な～にいってんだ。そんなわけないだろ。ただおまえが独り言を大声でいっただけだ。」
ギャー！！　でたーー！！
「おばけ扱いするな！　オレは教師だ！！　おまえの担任だ！！」
えーっと、名前なんだっけ。
「おい！？　オレの名前を忘れるな！！　オレの名前は、坂上だ！最初に名前いったぞ、おい！！」
うん、忘れた。
「んなことはどうでもいい！！　早く来ないからオレが迎えに行かされることになったんだぞ。感謝しろ。」
いいんだよいいんだよ。
「なにがだ！！　あ、そだ。オレ、あそこの郵便局に用があるからちょっと待ってろ。」
オレは、しばらく待ったあと、坂上が郵便局から出てきた。
「ごめんごめん。さぁ、行くぞ。今、そっちに行くからな。」
キキーーー！！　ドン！！
なにかがぶつかる音がした。かなりデカい音だ。なんだ？　事故か？
そうおもった瞬間、目の前が真っ白になった。

オレの体が、倒れた。そして、坂上が柄でもなくマジメな顔で走り寄ってきた。

「大丈夫か？」

大人の男の声。坂上か？

そうか、オレ事故に遭ったんだ。じゃ、ここは病院か。

今は、ギプスをして包帯グルグルな状態なのか。

そうおもって目を開けた。病院なかんじがする。でも、なにかが違う。

坂上に聞いたほうが手っ取り早い。

「う……。さ、坂上、先生。」

坂上なら「ん？　なんだ？」と返してくるはず。

「坂上先生？　誰じゃ、それは？」

は？？　坂上じゃない？

「わしは、あのときのじじぃじゃ。覚えておるかの？」

え？　って、ギャア！！　ほんとだ。あのときのじいさんだ。

「じゃあ、じいさん。ここはどこだ？」

「は？　おまえ、自分でここに来たんじゃないのか？　じゃが、妙に大ケガしてたようじゃがのう。」

はい？　全身骨折で病院に自分の足だけで来たと？　これを見ろ、これを。この全身包帯。

「どこがじゃ？　ここはマジカルワールドじゃぞ。そんなもん、魔法で治(なお)せるわい。」

今、なんていいましたか、おじいさん。マジカルワールドじゃってーーー！！

「どうした、口調がおかしくなってるぞい。」

まぁ、いいの！！　あ、そうだ！！　名前を教えるっつってたよな！！

「よく覚えてるのお。まあいい。わしの名前は。」

わしの名前は？

第8章　やっと本編入ります（後書き）

やっと本編入りましたー！！
ここまでにどれだけの期間があったんでしょうか（笑）。
ついに、じいさんの名前が明かされたら第2話突入です。

第1章　ビリー・ラフマニノフ

「わしの名前は、マーリンじゃ。」
マ、マーリン！？　あ、あの……。
オレのオカルト知識の語りが長いのは自分で自覚している。で、まとめると。

・中世伝説におけるもっとも高名な魔法使いの一人。歴史上に対応する人物としては、6世紀に実在した森に棲む隠者メルディンやスコットランドのマーリン・シルベスター（年代不明）があげられている。メルディンは、発狂して森に暮らすうちに予知能力や戦術を身に付けたと言われる人物。
・最もよく知られるマーリン伝承は、伝説のブリテン王、アーサー王の助言者で、強力な魔法使いとしてのマーリン。これはジェフリー・オヴ・モンマスの「ブリテン年代記」で最初に言及されるほか、さまざまな物語で異なるマーリン像が描かれる。
・アーサー王物語の中ではマーリンの母は身分の高い女性で、父は夢魔（むま）であるとされている（物語によっては悪魔とも妖精ともされている）。生後、このままではマーリンは邪悪な存在になってしまうと考えた母がすぐに教会に行って身を清めさせたので、マーリンから邪悪な部分が消え、不思議な力だけが残ったと言われる。
・トランプのジョーカーの如（ごと）き万能の男だが、その最後は愛した女に騙され塔の中に幽閉され死ぬ運命となる。

・隠者とは、内なる案内人、他の人からの賢明なアドバイスのこと。推薦、到達、インストラクター。
・ちなみにマーリンのフルネームは、マーリン・アンブロジウス（Ｍｅｒｌｉｎ　Ａｍｂｒｏｓｉｕｓ，　Ｍｙｒｄｄｉｎ　Ｅｍｒｙｓ）。
・発狂とは、気が狂うこと。統合失調症系の精神病が発症すること。もしくは、大げさな表現として、「気が狂うほど」怒ったり、精神的に追い詰められたりすること。
・ブリテンとは、グレートブリテン島（Ｇｒｅａｔ　Ｂｒｉｔａｉｎ）のこと。北大西洋に位置する島で、アイルランド島、マン島などとともにブリテン諸島を構成する。ヨーロッパ大陸からみるとドーバー海峡を挟（はさ）んで北西の方向にあたり、ヨーロッパ地域の一部。面積は、２１９，８５０ｋｍ²で、世界で９番目に大きい島。イギリスの国土の中心的な島で、同国の首都ロンドンをはじめとする多くの大都市を有する。グレートを訳して大ブリテン島と呼んだり、取り去ってブリテン島と呼ぶ場合もある。
・グレートブリテン島は、政治的に見ると、グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国（イギリス）の構成要素であるイングランド、スコットランド、ウェールズの３つの「国」からなる。
・夢魔（むま）は、キリスト教の悪魔の一つ。下級の悪魔。
・如きとは、比喩（ひゆ）・例示を表す。現代では改まった表現をする場合に用いられる。
・幽閉とは、ある場所に閉じこめて外に出さないこと。
・比喩（ひゆ）とは、なぞらえ、見立て、喩（たと）えのこと。

「見事なわしの描写と知識じゃ。それで、その才能じゃ。魔法使い

には、才能と呪文を覚えるための記憶力、そして一生かかっても魔法を追求する根性が必要じゃ。魔法は日々進歩するからのう。わかるか？」
　あたり前田のクラッカー！
「なにをいっておるのか、わしにはよくわからないが、そんな余裕があるなら大丈夫じゃろう。それでな、詳しくはいえんが、学には予言がでておる。それで、いつか近くに学にはマジカルワールドに来てもらおうとおもっておったんじゃ。しかし、なぜ安全に、まあ大ケガをしておったが、ここに来れたのかの？　もしや、あいつがわざと……。」
　最後の一言はとても小声だった。
「それは、私よ。マーリン。」
　どこか聞き慣れた声。そして、安心する。でも、そんな1年ずっと聞き続けましたってほどでもない。そうおもったと共に、寒気がした。声からも優しさが溢れてるんだけど、どこか奥に殺気が潜んでいるような……。
「って、ビリー！？」
「あらー、学ー。元気じゃなーい。安静にしていてちょうだいねぇ。安静にしてないと、死ぬから。」
　最後の一言はけっこう効いた。体が全然動こうとさえしない。
「で、でも。ビリー、ここってマジカルワールドだろ？　なんで普通の人間のビリーがここにいるんだ？」
「あら、普通の人間とは失礼な。私は、れっきとした魔法使いよ。基本、攻撃も守備も使わずに、治療しか使わないけど。だけど、学が事故ったときはとっさに移動使っちゃった。」
　ビリーが魔法使いですと？　だからあんな人間離れした殺気を……。
「そ。魔法使い。本当の名前はビリー・ラフマニノフ。附属中の保健室長。あと、殺気は魔法とは関係ないから。」
　ア、アハハ、そうですよねー。でも、ビリーって本名だったのか。

ビックリ。
「あ、そうじゃ。学。で、その附属中じゃ。わしは、学に王立魔法大学附属中学校に行ってもらおうとおもう。というか行かなくてはいかん。そこで1つ提案だが、わしと下見も兼ねて学校探検をしないかのう？」
なんですとーっ！　あの有名なマーリンと学校探検ができる！？
行く行く、行きます、行かせてください！！　それで、その附属中とやらにはどうやって行くんだ？　もしや、オレは今人生初の魔法体験の瞬間に向かっていってるのか！？
「ここじゃよ。」
は？
「だから、附属中はここじゃといっておるだろう。」
えぇぇぇぇぇ。オレの初魔法がぁぁ。
「なにをガッカリしておる。さぁ行くぞ。」

第1章　ビリー・ラフマニノフ（後書き）

我ながら、ラフマニノフって変な名字使っちゃったなぁとおもいました（笑）。
けど、いたんですよ。なんか。

今回、後で自分で読んでみたら、ビリーが若いイメージになってるっぽいことに気が付きました。
ですけど、ビリーも一瞬でも若返りたいかなとおもい（笑）、そのままです。

第2章　魔法初体験（前書き）

昨日（２０１１年８月１４日）は、お盆でしたので、はい。
しっかり渋滞にも巻き込まれ、帰ったら完全夜でした。

第2章　魔法初体験

あー。
「どうしたのじゃ、学。」
いや、あのな、マーリン、オレはもっとすごいのかとおもってたよ。
「まったく意味がわからん。わしは一応イギリス人じゃ、ちとわかりにくいんじゃが。」
ああ、そうだな。いや、これは日本人でもわかんないって。はぁ。
あのな、オレは、もっと魔法使いにロマンをもっていたんだ。なのに、なのに、移動魔法は体験できなかったし、ビリーが普通の魔法使いだし。はぁ。
「ロマンか。そんなすごいこともないぞ。魔法使った事件は証拠なんかありゃしないし、ここでは魔法は無限じゃ。そんな希少価値もないから、魔法をガソリンのように使っている。サイエンスワールドよりも数倍大変じゃ。しかも、わしくらいになると、学校の校長にならないか、元老院に入らないか、などとうるさくなる。メンドくさいのう。」
そういや、マーリンって何歳なんだ？　わしくらいって何歳なんだろ。いきなり、「レディーに歳を聞くなんて失礼な！」とはいわないだろうな。
「わしか？　忘れた。そんなのいちいち覚えとったら生きとられんわい。」
忘れたって。おい。そんなに生きてんのかよ。ってか、本人がこうだからオレも知らないのか。
「学、いつまで廊下で立ち話をするつもりじゃ。廊下に住みたいのか？」
違います。廊下に住みたくありません。ちゃんとしたところに住みたいです。

「ついてくるがよい。」
　そういって、マーリンは階段を下りていった。って冷静に見てる場合じゃねぇ！！　ついてかないと、迷子になるんですけど～。
「ここは1階の正面玄関じゃ。基本、生徒も教員も使わん。全員寮暮らしじゃからのう。教員もじゃ。客しか使わん。」
　そういって、マーリンは歩いていく。
「ここは、ロビーじゃ。ここでは、全員が朝食・昼食・夕食を食べる。テーブルが4つにわかれておるじゃろう？　それは、4つの寮があるからじゃ。寮ごとにテーブルがあり、寮ごとで食事する。寮は、学校の創立者4人の名前が使われておる。全員が、どれか1つの寮に所属する。自分はどこの寮か、楽しみにするんじゃな。」
　おお、ロマンチックだー。名前はどうなんだ？
「名前くらいはいいじゃろう。寮は、ブルックス寮・カイル寮・エルリック寮・ブラッドレイ寮じゃ。」
　うほー。名前かっくいー。感激だぜ。……、う、なんかさっきの移動魔法とビリーのことをおもいだしちまった。
「しょうがないのう。学は学校に入りたくないのかのう？　これが、最近よくいうマリッジブルーというものか。」
　ちがうから！　確かにマリッジブルーとおんなじかんじだけど、結婚しないからね！！
「勉強になったわい。」
　聞けよ！？
　マーリンったら、ローブのなかから手帳をだして、マリッジブルーのことを書いている。
　ぬおうっ。もういい、オレは諦めた……。

「次は、寮へ行くぞ。」
おっ、寮か。
「ここじゃ。まずは、どこへ行くかの？」
そうだな。なんか名前がカッコいいから、エルリックだな。全部カッコいいんだけど。
「わしも、どれもカッコいい名前だとおもうがの。やはり、エルリックじゃな。なんかカッコいいんじゃ。学、わしたち気が合うのう。」
オレも同感！　ってか、マーリンと気が合うって最高です。
これまた正面玄関から入ると、そこはバカデカい部屋だった。
「ここは、談話室じゃ。ここでは、寮生が好きなように過ごす。ここには、テレビやパソコンがある。Ｗｉｉもあるし、ＤＳもある。これが、とても楽しいんじゃ。皆（みな）は、科学自体は必要としてはいないが、こういうのはとても人気じゃ。これは、サイエンスワールドの日本、学が住んどる国の者が考えたそうではないか。サイエンスワールドはすごいのう。あ、そうじゃ、今度学の家に泊めてくれんかのう？　楽しそうじゃ。学の友達に会ったり、ハイテク機器も使ってみたいのう。そうじゃ、サイエンスワールドの学校の授業も受けてみたい。あぁ、楽しみが広がる……。」
マーリン、意外に妄想癖あり？　でも、マジカルワールドでもゲーム機器って人気なんだな。翔に教えてやりたいなぁ。翔、「ゲームは最高だからな！！　みんなに人気なんだ。学、ゲームがオレレベルのヤツいない？　勝負したいなぁ。」とかいいそうだ。咲にもこんな学校があることとか、マーリンと超仲良くなったこととか教えたいなぁ。
……、みんなどうしてるかなぁ。あ、そうじゃん。オレ、上条中でいっぱいいろんなヤツらと仲良くなったじゃん。まだ、中学ライフ始まったばかりだ。部活でレギュラー取る夢だってある。ここも、すっごく楽しそうだけど、上条中には、オレの居場所がもうある。
「なぁ、マーリン。」

「すまない、学。学から迷いの力がでているので、心を覗(のぞ)かせてもらった。確かに、もう御主にはサイエンスワールドには居場所がある。しかし、マジカルワールドにも居場所がある。このマーリンの親友というな。そして、御主には使命がある。それをよく考えることじゃ。」

マーリン、オレを親友だなんて……。

「わしの若き親友、ベストフレンドじゃ。ちなみに、マジカルワールドの1日は、サイエンスワールドの2日じゃ。よく覚えておけ。しかし、学校のことはビリーにまかせておいた。ビリーは頭がキレるからのう。きっといい方法を用意したじゃろう。」

でた、ビリー。

「さぁ、これからどうする。サイエンスワールドに戻るかの？　今、マジカルワールドでは新学期が始まったばかりじゃ。もし、学が転校するなら9月からのほうがいい。でも、制服などの用意もしなければのう。それは、夏休みでいいんじゃが。」

「マーリン、オレ戻るよ。夏休みになったら制服とかは用意する。」

「転校するんじゃな。」

それもさみしいなぁ。

「それも、いい方法があるから大丈夫じゃ。夏休みになったら、迎えに行く。金を用意するんじゃぞ。あと、泊まるのもよろしくな。」

ああ、母さんにいっとくよ。

「よし、移動魔法を使う。念願の魔法初体験じゃよ。」

マーリンが笑いながらいった。

「バティン、移動。」

第２章　魔法初体験（後書き）

うはー、大変大変。
今回は、呪文考えるのに４８時間かかりました。
あれ、最終的には、ソロモン７２柱になりました。
ゲアブは、ＧＡＡＰで人間を一瞬に別の場所へ移せるらしいです。
とおもってたら翌日。
他のオカルト本読んでたら重大発見。
そんなことゲアブの欄になかった。バティンでした。同じ７２柱ですけど。
しーかーもー、名前が別でしたー。別名あり過ぎでした。
同じ序列３３位には、ガアプってありましたー。
でもこれ、７２しかないからすぐネタ切れしそうｗｗ。
誰か～、呪文のネタを私に授けてくだされ～い。

寮の名前も頑張りましたよ。
ですが、最後のブラッドレイはイマイチかも。ブラッドでいいかなーと、自分でおもったぐらいです。

第3章　マーリン、忘れ物をする

さあ、目を開けたら、そこはサイエンスワールドで。
って、あり？　目の前にマーリンらしき物体があるが。
「らしき物体ではなく、マーリンじゃ。」
ですよねー。
なに？　マーリン、魔力尽きた？
「そんなことがあるわけなかろう。杖を忘れただけじゃ。」
杖？
「そうじゃ。杖は知識の象徴というのはわかっておろう？　杖は老人の持ち物じゃ。老人は知恵を持っていることから、杖が知識を象徴するようになった。」
それはわかってる。っていうか、杖使うの忘れたのに、ガッツリ杖の解説始めるってなんなんでしょうか。
「それもわかっておる。一応解説じゃ。解説を始めてなにが悪い。それで、魔法使いの前進、ドルイド、これは魔法学校でやるじゃろう。がもっていたものが、樫の木じゃ。ドルイドはケルト人の僧侶じゃということを頭に刻んでおいてほしい。ケルトも習う。それで、ケルト文化では、樫の木が聖なるものじゃった。というわけで、杖は魔法使いにとって大切なものなんじゃ。これがなければ、どんなに魔力が強くても、そこらへんの人間と同等か、それ以下になってしまう。」
それはわかったんだけど、なんで魔法使いが杖がないと、そこらへんの人間以下になっちまうんだ？
「それは、マジカルワールドの人間の大半が、魔法に頼って生きているからじゃ。なかには、魔法なしでも生きていけるヤツもいるがのう。料理をするのも魔法、洗濯物をたたむのも魔法、という具合じゃ。それだけじゃったらいいんじゃが、移動が使えるようになると、調子に乗って歩かなくなるヤツもいる。そんなに頼りっきりじ

ゃから、魔法がなくなると、まるで言葉を喋る赤ん坊のようになってしまうのじゃ。」
う、想像しただけで、キモい……。
ちゃんと髪が生えてて、下手したら髭が生えてて、言葉を喋って、体もちゃんと成長してるのに、なにもできなくて、ベッドから「学、飯はまだか～？」と急かされる。
うう、キモいなぁ。
「じゃろ？　わしも同感じゃ。しかも、それが口うるさい元老院の老人だったらどうする？　もう地獄じゃ。最悪じゃ。ああ、寒気がするわい。」
どんだけ老人嫌いなんだよっ。
って、なに魔法を語って時間潰してんだよ！　オレはサイエンスワールドに戻るの！！
「まあまあ、ビリーがいい手を打ってくれたんじゃし、まったりしたらどうじゃ。そういえばの、さっき「りんか」というものが、「あとから気づいたんだけど、第2話まだ2章しかやってなかった。これじゃ、2話がスーパー短いから魔法失敗して！　作者に免じてお願いします！！」と電話が来てのう。よくわからんかったが、杖を忘れていたのをおもいだしたからの、了解といっておいたぞ。」
りんか？　誰だ、そいつ。ってか、作者ってなんだよ。オレはフィクションじゃないの！　ノンフィクションだぁ！！
「よくわからないのう。魔法も失敗したし、もう用はないんじゃないかのう。もう記憶から消し去っても構わんとおもう。」
そうだよな。よし、オレは、今から「りんか」という存在を脳内から消す！
「宣言しなくてもけっこうじゃ。よし、わしも「りんか」を脳内から消すぞい。」
マーリンも宣言してるんですけどっ。
あ、そだ。そういえばさ、まったりするっていっても学校にいるわけにはいかないよな。やっぱりどうすんだ？

「それが問題なんじゃ。しばらく、わしの家にくるかの？」
マーリンの家ですとぉ！！　行く行く、行きます、行かせてください！！
「学校探検のときも同じセリフをいっておった気がするのう。」
いいんですっ。
「今度こそ成功させるわい。バティン、移動。」

おわー、きれいだ。
雲ひとつない青空、日光を受けて輝く草、そしてなによりも、空気がおいしい。最高です。
「じゃろじゃろ？　じゃから、ここを選んだのじゃ。そして、光り輝くマーリンの屋敷！！　いいじゃろ？」
自分で光り輝くって、ねぇ。
しかも、こんな自然いっぱいなとこに光り輝く屋敷って環境に悪い……。
「冗談じゃ。光り輝いておらん。光り輝いたら、近所迷惑じゃし。」
近所迷惑？　こういうとこって、となりの家まで歩いたら半日って……。
「本の読み過ぎじゃ。ここは、マジカルワールドじゃぞ。移動が使えるじゃろう。移動が使えれば、家はド田舎、買い物は大都会。しかも、移動時間は一瞬ときた！！　これを利用しないでどうする。」
そういえばそうだな。便利だなぁ。だから、ド田舎のここには、家がいっぱいってことか。
「しかし、移動を失敗すれば、そこらへんの壁に埋まってしまうこともあるんじゃ。また移動すればいいんじゃが、魔力の無駄遣いじゃし、壁に埋まったとなると、気分が悪い。マジカルワールドでは、

移動で壁に埋まらないことが、魔法使いとして一人前という考えなんじゃ。反対に、埋まったとなると、笑い者決定。というわけなんじゃ。」
大変だなぁ。
「そうなんじゃよ。大変なんじゃ。学も、むやみに手をださないほうがいいぞい。」
ふーん。手をだしたいなぁ。
「学も、気楽じゃのう。まあいい、わしの家を案内するぞ。」
お〜！！　本邦初公開、マーリンの「自称」光り輝く屋敷です。
「学、いつからテレビのマスコミになったんじゃ。」

第3章　マーリン、忘れ物をする（後書き）

さあさあ、マーリンに電話をかけてすぐ脳内から消された、りんかです。
2人とも、ひどいんですけど。宣言して消すなんて。
せめて、普通に忘れ去ってほしかった……。
学「おーい、マーリン。普通に忘れ去ってほしいって、りんかがいってるぞ。」
マ「学、りんかのことは忘れ去ったんじゃなかったのかのう？　宣言して。」
もう、いいです、この2人……。

さあ、気を取り直して、解説いきましょー。
あの「りんか」のセリフは、本当のことです。だってそうだったんですもん。
終わりです……。
ああ、ショックでテンションが低い……。

第４章　学、変な夢を見る（前書き）

先週から、夏の宿題などなどに追われ、久しぶりの更新になりました。
お詫びの意もこめて、魔法学校を連続２話更新＆ａｍｐ；女将軍更新します。
たぶん、できます……。

第4章　学、変な夢を見る

デカい。デカすぎるぜ、おい。
ここは大魔法使いマーリンの家であり、「自称」光り輝く、本邦初公開の家。
そして、ド田舎にある。
オレ、オカルト本で、魔法使いの家ってこういう大豪邸ではないって読んだんですけど？
「本の読み過ぎじゃな。魔法使いだって、豪邸に住みたいじゃろ。」
ま、いっか。せますぎても困るからな。
「ここがリビングじゃ。しっかり見とくんじゃぞ、わしの家を人間で見れるのは、レアじゃぞ～。」
はいはい、見ときますよ。
あ、シャンデリアだ。地震起きたら終わるな。
ほかにも、ソファがセットで2つある。1人暮らしだろ？　こんな使わねぇって。
「使うんじゃなー、これが。ここは、応接室兼用じゃ。じゃから、きれいなんじゃ。あと、ここは地震は起きないぞい。日本ではあるまいし。」
そうだな。日本じゃねぇし。
マーリンが廊下へ行った。
そして、1番手前であり、左側にあるドアを開けた。
「ここが、学の部屋じゃ。広いじゃろ？」
うわー、広い。さっきのリビングほどではないけど、少なくとも寮の部屋（6畳）の3倍はある。
「しばらくここで休むといい。そのあいだに、わしは仕事でもするかのう。あー、だるっ。」
最後、キャラ変わりませんでした？
でも、魔法使いの仕事ってなんなんだ？

「うーん、そうじゃのう。いろいろあるんじゃ。わしの場合は、本を執筆したり、お偉いさんと会談したり。」
魔法使いも大変だなぁ。こういうのを聞くと、上条学園の理事長のほうが楽そうだ。
「じゃあ、わしは行くぞい。」
マーリンが部屋から出て行った。

あれ、ここはどこだ？
今は、夜みたいだ。だが、場所は暗くてよくわからない。
……、草？　あれ、人間がいる。
オレの目が暗闇に慣れてきた。
ここは、野原か。
正面にいるのは、ツルピカ野郎。つまり、ハゲだ。性別は、男。頭だけが、月光を反射している。
「やはり、おまえか。」
ツルピカ野郎が、言葉を発した。
「誰だ、おまえは。オレの名前は、上条　学だ。」
「ふむ、上条　学か。覚えておいてやる。私の名前は……、X。」
X？　偽名か。
「まさに、予言の通りだ。」
予言？　なんだ、それは？
その質問に、Xは答えない。
「死ね、上条　学。」
そして、杖を取り出した。
「……。」
なんだ？　なにを言った？

と同時に、Ｘの杖から、雷のような光がでた。
そして、その光はオレを襲った。

第４章　学、変な夢を見る（後書き）

前書きの通りです。
また近くに、更新します。

第5章　学、覗き見をする（前書き）

約束通り、ハイペースで更新しました！

第5章　学、覗き見をする

「学、学！！」
あ、マーリン。
「あ、マーリン、じゃないわい。学、おまえ、すこぶるうなされておったぞ。変な夢でも見たかの？」
じゃあ、あれは夢だったのか……。
って、「すこぶる」ってなんだ？　英語か？
「英語じゃないわい。バリバリの日本語じゃ。「すこぶる」とは、現代風にいうと、「すごく」という意味じゃ。」
変な日本語使わないでほしいんですけど。
「変な日本語ではない。昔の日本語じゃ。って、夢じゃ、夢！　変な夢ならば、話してほしいんじゃが。」
オレは、今見た夢のことは思い出せるかぎり話した。
だが、不審な点がいくつかった。
1つ目は、野原のこと。オレ、なんかあの野原見たことある気がするんだよなぁ。
2つ目は、あの夢にでてきた人間。人間だってことは覚えてるんだけど、どんなヤツだったかはもちろん、性別も忘れた。どんなヤツだったのか、ちっとも覚えてない。
人間について覚えていることは3つ。あいつが魔法使いだってこと、「死ね、上条　学。」といったことと、予言がなんちゃらっていってたことだ。
「それだけかの？　他に覚えていることは？　どんなことでもいいんじゃ。外見の特徴は？　ハゲのツルピカ野郎だったとかないかの？」
ハゲのツルピカ野郎？　なんでいきなり、そんなドンピシャなことをいいだすんだ。まさか見当ついてんのか？
「な、な、なわけなかろう……。例えばの話、じゃ。例えば。うん

うん。そこを忘れたら終わりじゃ。アハハハハ、ハ、ハ、ハ……。」
マーリン、異常にテンパってるし。「な」と「ハ」が多すぎるぞ。
しかも、なんか1人で納得しちゃって。気持ち悪いぜ。
「さ、さぁ。学、へ、変な夢を見たのなら、もっと休まなければ体がもたないぞい。わしは、これからお偉いさんと会談じゃ。学には重たい話じゃし、正直いうと「大人の事情」ってヤツじゃから、そ、そのう……、こないほうがいい。じゃあ、その、えっと、えー、まぁ、がんばって休むんじゃぞ。」
あのー、言葉つまりまくってません？　しかも、最後の「がんばって休む」って、どう休むんでしょうか。意味がわかりません。
「そ、そんなことは、ないぞ。アハハハハ。」
マーリンがドアをバタンと閉めた。
怪しい。怪しすぎる。
これは覗(のぞ)き見するのに価値ありだな。
よし。行くぜ、学。
まずは、ドアをそろっと開けてっと。
あり？　マーリンが電話らしきことをしてるぞ。でも、正面を見てる。あ、そうか、あれはスマホだ。スマホとは、スマートフォンの略のことである。って、解説してる場合じゃねぇ！！　しかも、スマートフォンってなんだよって人にはわからない説明だな。
ともかく、スマホは、テレビ電話ができる。テレビ電話ってなんだよって人は、自分で調べましょう！！　……、オレ、なにスマホのテレビショッピング的なことをしているんだろう。
「ビリーか？　マーリンじゃ。緊急で相談がある。内容？　今ここでは話せない。あいつに聞きとられるかもしれん。即急に来てくれ。じゃあ。」
あいつ？　誰じゃ、それ。
ボフッ。遠くでなにかが爆発した。そして、人影が見えてきた。
うおい！？　誰じゃ、おまあ！？
「ビリーか。待っておったぞ。」

マーリンが手を差し伸べた。
「マーリン。お待たせ。で、本題からいくと、相談って？」
ビリーも、手を差し出す。握手だ。
「まずは、座ろうではないか。」
マーリンがビリーをソファに座るようにうながす。
そして、ビリーが重々しく口を開いた。
「大丈夫なの？　こんな無防備で。私が試しに移動を使ったみたら、簡単に入(はい)れたわ。危ないんじゃない？」
「大丈夫じゃ。ここには、関係者以外、虫でも入れないようになっておる。」
マーリンが自信ありげな目でオレを見つめて、ウインクした。
くそー、バレてたのか。
「なら安心だわ。それでさっき、「あいつに聞きとられるかもしれない」といったでしょ。あの、あいつって……？」
「あいつとは、Xじゃ。そのことなんじゃが、学が変な夢を見たといってのう。」
マーリンがオレの見た夢のことを話した。
でも、Xって誰だ？
「X？　かなりヤバいわね。でも、夢に入るなんて高度な魔法、できるなんてすごいわ。ま、すごいかわりに、できる魔法使いも限られてくる。変装してても、魔法くさいのはわかるとおもうから、捕まるのは時間の問題だとおもうわ。ったく、困るわね。私たちのたった1つの希望を、夢であれとも、攻撃するなんて。」
「ビリー、余計なことはいうな。もし、誰かに聞かれていたらどうする。それが、どんなに深い関係者であろうとも、それは危ない。」
マーリンが、またオレを見ながらいった。必死に笑いをこらえている。オレも笑いを必死にこらえる。
「またー、マーリンったら、物騒なこというわね。そんなわけないでしょ。マーリンの魔法を破るなんて、一部の魔法使い以外無理よ。」

マーリンが地味に貧乏ゆすりをしている。魔法使いって、笑いをこらえるときは貧乏ゆすりをするのか？　驚きの新発見。
「ビリーよ、それで御主には学の護衛を頼みたい。よいか？」
「合点承知の助！！」
ビリーが笑いながらいった。そして、ボフッと空気が爆発した。

第5章　学、覗き見をする（後書き）

スマートフォンとは、携帯電話・ＰＨＳと携帯情報端末（ＰＤＡ）機能が付いた携帯端末のことである。通常の音声通話や携帯電話・ＰＨＳ単独で使用可能な通信機能だけでなく、本格的なネットワーク機能、ＰＤＡが得意とするスケジュール・個人情報の管理など、多種多様な機能を持つ。
テレビ電話とは、電話にビデオカメラとビデオモニター画面を組み合わせて、相手の顔を見ながら話すことができるシステムの名称である。

どうでしょうか、わかりましたか？
ども、りんかです。前回の後書きは適当過ぎたので、今回は内容を「濃く」、書きたいとおもいます。
Ｘは、後に大活躍（？）します。あー、どうしましょう。最初予想してたよりも、話が暴走して、あらすじどおりに話が進むか危ういです。がんばりますけど（泣）。

終わってしまった。ネタがないったら、なーい！！　では、また今度。

第6章　マーリン、決闘する（前書き）

久しぶりの投稿です。
女将軍、結局更新できませんでした。
これからしばらくは、魔法学校一筋で行きます。

第6章　マーリン、決闘する

ドンッ。

な、なんだ？　地震か？　そうか、ついにイギリスみたいなとこでも地震が起きるなんて、世界がもう終わるってことか！？　そうなのか！？

「違う！！　これは地震なんかではない、魔法突破じゃ！！　なんじゃ、これは。この超強力な魔法くささ。そこらへんの魔法使いとは格が違う。でも、なぜじゃ。わしの魔法を突破できるなぞ、相当危険じゃ。わしに断らないのも、怪しいぞ……。」

なんだ、なんだよ。テロか、ハイジャックか、暴動か！？

「フフフフ。」

だ、誰だ。知らないぜ、こんな声の持ち主は。でも、知ってるような、知らないような……。

「上条　学。私のことを覚えているか？　私だ、Xだ。でも、覚えていないんだろうな。いや、この私の魔法に勝てる者など、いるわけないな。それもそのはず、私が忘却をかけたのだから。」

なんだよ、こいつ。うぬぼれやがって。

って、今Xっつった？　Xといえば、昨日マーリンとビリーがそんなことを話していたような。

「上条　学。おまえは、私にとって、最大の敵であり、味方だ。そのことを忘れるな。」

はあ？　意味わかんねぇし。敵が味方とか、おまえ頭大丈夫か？

「こ、この私をバカにしおって。今回は見逃してやるが、今度会ったら覚悟していろ。今日、私がここに来たのは、上条　学にさっきのメッセージを伝えるためというのと、マーリン、おまえだ。おまえに決闘を申し込む。」

は、はい～？　マーリンに決闘？　無理だろ、マーリンは最強の魔法使いだ。おまえなんかに、勝てるもんか。

「いってくれるな、上条　学。まあいい。おまえは、私とマーリンの決闘を指をくわえて見てるんだな。私が勝ったときの、証人となるために。」
　こいつ、ムカつく。人の話をまったく聞いてねぇ。しかも、自分が勝つって決めつけてるし。
「さあ、マーリン、この決闘、受けるよなぁ？　大事な希望のために。」
「しょうがない、受けてやろう。しかし、場所などはこっちが決める。いいな？」

「それでは、決闘を、始めます。」
　審判は、オレ。
　っていっても、審判は存在意義はない。ルールはマーリンとX。決闘をする本人たち。オレは形だけってことだ。
「それでは、始めっ。」
　ここは、土手みたいなとこ。すぐ近くに、川がある。
　のどかな風景なだけに、2人が放っている雰囲気は、浮いている。
　2人は睨み合っている。マーリンもXも、すごい殺気だ。
　Xが時計回りに、歩き始めた。マーリンも、歩き始める。
　2人の足並みはそろっている。そして、遅い。お互い、様子を窺(うかが)っているようだ。
　と、Xがマーリンに背を向けて、走り始めた！　マーリン、やっちゃえ！！
　って、あれ？　マーリンは攻撃しない。
「さすがに大魔法使いは、こんな罠には引っ掛からないか。」
　罠？　そうか、Xはわざとこんなことをして、マーリンに攻撃を

させようとしたんだな。
「そうだ、わしは、こんな子供だましには引っ掛からない。わしにわざと攻撃させて、攻撃をバリアで反射しようとしたんじゃろ。」
そうか。でも、見ただけでどんな魔法を使ってるのかわかるなんて、すごいな。
Xが舌打ちした。かなり苛立(いらだ)っている。どんな魔法を使ったかまで、察知されるとは、おもってなかったんだな。
そしたら、Xがもう我慢できないというように、杖をマーリンに向けた。
「もう罠など使わない。正々堂々を勝負しようじゃないか。」
「ふん、おまえから正々堂々という言葉がでてくるとわな。ビックリして、ギックリ腰になりそうじゃぞい。」
マーリンが挑発をするように、ニヤリと笑った。
と同時に、Xの顔が怒りでねじ曲がった。
「う、うるさい。おまえに、私のなにがわかる。そうだ、おまえなんかに私のことはわからない。わからないんだ!!」
Xは自分に言い聞かせるようにいっている。
しかし、マーリンはまだニヤニヤしている。
「それはどうかな?」
「もう、我慢ができない。マーリン、だからおまえなんか大嫌いなんだ!! 昔から、私のことをわかったようなふりをしやがって。もう、おまえに用はない。私は、マーリンをこの手で倒したという称号が欲しいんだ!! おまえなんか、おまえなんか、消えちまえ!!」
なんか、いきなり、Xの精神年齢が下がったような?
どうしたんだよ、こいつ。最初とは全然雰囲気が違う。駄々っ子みたいだ。
「うおぉぉぉぉぉ!!!!!!」
Xが叫んでマーリンに突っ込んで行った。
そして、至近距離で、マーリンに魔法をかけた。

土手が光に包まれた。２人の影だけが見える。
一方は、倒れた。
そして一方は、力強く地面に立っている。
光は、もう少ししないと、消えないようだ。

第6章　マーリン、決闘する（後書き）

マジ久しぶりの投稿です。
こんちは、りんかです。

今回、決闘起こしちゃいましたね、X。
どっちが勝ったのかは、来週公開です。秘密なんです。
学「結果なんて、わかりきってんじゃねぇか。大体こういうのは、正しいｈ（蹴）。痛ってぇ！？　おいりんか、飛び蹴りすんなよ、学くんイジけるよ？」
り「勝手にイジけてろっ。学が変なことというと、あたしの物語構想が崩れるんじゃ、ボケい！！」

なんで決闘起こしたかというと、ネタがなかったからです。
第2話まだ5章までだし、でももうマジカルワールドでこの時期の出来事ないしってことで、Xに爆弾発言させました（笑）。

っていうか、最初、Xだす気なかったんですよ。
Xの存在もありませんでした。
証拠に、最初の登場人物紹介で、Xいないんですよ。
ぶっちゃけいっちゃうと、今の設定（予言とか、Xとか、物語の軸ですね）とかなかったんですよぉ！！
学に戦わせる気も0だったし。
最初、私が好きな、銀魂とか、スケット・ダンスとかの読み切り系のおもろいヤツが書きたかったんですけど、難しくて断念。
ということで、急きょX出現して、誰かさんに予言させて、今の状態になったわけなんです。

X「じ、じゃあ、私は最初、いなかったということか？　しかも、

私が上条　学を殺したがっている理由も、後付け？」
り「そういうこと。」
X「なんだとっ。りんか、覚えていろ！！　上条　学と一緒に、地獄へ堕としてくれるわ！！　ちなみに、マーリンは私が倒したから、もうこの世にはいないっ。マーリンファンめ、ざまあ見ろ！！　そして、マーリンファンは今すぐXファンクラブに入会することを命ずるっ。」
り「勝手にマーリン殺した妄想するなぁ！　そして、それをエサに新規ファンを獲得しようとするな！！」

第7章　戦いに後に……

光が、消えた。
立っているのは、マーリンだ。
倒れたのは、X。
「勝者、マーリン！」
Xは死んでいるのか？　死んでるほうが好都合だ。
オレは、Xに近づいた。Xの脈をとってみる。
……、Xは生きていた。しかし、不整脈だ。しかも、ドキドキしている。
Xの手がピクッと動いた。
オレは、後ろに後ずさった。
「マ、マーリン……。私は、私は、負けた……。だが、今に見ていろ……。すぐに、すぐに……。」
その手が、なにかを求めるように挙がった。
そして、崩れ落ちた。
「学、Xはまだ生きている。わしが、適当に封印しておくから、学は帰るんじゃ。」
そうだな、素人は帰るとするか。
ってあれ？　どうやって帰るんだ？
「あ、学が魔法を使えないことをすっかり忘れておったわい。すまんすまん。」
マーリンが、杖を取り出した。
「バティン、移動。」

マーリンは、Xを見降ろした。
「困ったもんじゃ。」
マーリンはそう呟き、Xを担いだ。
「たまには、体を鍛えんとな。」
マーリンは、1人で微笑んだ。
マーリンはなぜ、魔法だけを使うことを嫌うのか。
それにはもちろん理由がある。
ある少女に起きた魔法がらみの惨劇。ちなみに、ある少女は人間だ。しかも、日本人である。
それだけだった。それだけのために、マーリンは魔法だけを使わないことを堅く誓った。
その、ある少女についての話は、また今度にしよう。
「ここかの？　はぁ、わしも衰えたもんじゃ。記憶力がカスになっとるわい。昔のことがよく思い出せん。」
マーリンはため息をついた。
そして、Xを一旦降ろした。
ここは、洞窟。ただの洞窟である。特になにも思い入れはない。
マーリンは昔、数回ここに来たことがある。
しかし、本人もいったように、記憶力がカスになっているため、よく覚えていない。覚えていないということは、そんな重要なことはなかったのだろう。
「ここに封印しとくかのう？　でもXのことじゃ、すぐ復活するかもしれん。ああ、どうしよう。」
マーリンはそこらへんを歩き回り始めた。
「もう、いい！！　まぁ、どこに封印しといても同じじゃ！　だから、大丈夫じゃ！！　たぶん……。」
最後、勢いが尻すぼみになっているが、マーリンのことだ、大丈夫だろう。たぶん……。
マーリンがXを再び担ぎ上げた。
そして、洞窟のなかに静かに横たわらせた。

「X、お願いじゃ。どうか、どうか学にだけは手をださないでくれ。お願いじゃ。」

マーリンはそう言い残し、洞窟の入り口を塞いだ。

第7章　戦いに後に……（後書き）

すいませんねぇ、テスト期間だったうえに、カゼをひいてしまいまして。
更新遅れてしまいました。

私、謎を多く残しているくせに、全然そういうの考えてないんですよねぇ。
今回も、ある少女について謎を残しましたが、それはまあまあ妄想は固まっています。
ですが、他がね・・・。把握できてないんですよ。どういう謎を残したのかさえ。
今度、全部読み返してみよ・・・。

第1章　昔々のお話

それは、何年も昔、マーリンが子供だった頃。
ある少女がいた。少女の名は上条　舞子。学の先祖である。それが何代前なのかは、誰にもわからない。マーリンにもだ。
舞台は、日本。年代は江戸時代末期。波乱の時代である。
悲劇は、舞子とマーリンの出会いから始まった……！！

はぁ……。なんかおもしろいことねぇかなぁ。
最近なんだか物騒だしよぉ、おっ母やおっ父には家から出んなっていわれるし。
早く将軍様も諦めればいいのによぉ。
おっと、危ねぇ。こんなこと口にだしたら、不敬罪で捕まっちまう。
でも最近、「ぺりー」とやらが黒くてデッカい船に乗って、大砲撃ってきたんだ。
あたしたち日本は、なにもできなかったじゃねぇか。
「ココハ、ドコデスカ？」
ん？　あれは南蛮人じゃねぇか。
ほえ～、南蛮人なんか初めて見たな。目が青いし、髪が黄色っていうか、輝いてる。でも、あたしと同じくらいの歳だ。つまり、若者。

舞子の視点からでは、歳の描写がメンドくさいことになるので、こちらで解説しよう。

舞子の言っている「若者」とは、成人したが若い者のことであるのはわかるであろう。
しかし、この時代の「成人」は15歳程だ。現代の感覚では、20代前半といったところだ。
さて、ここで解説は終わりにして、話に戻るとする。

「南蛮人ジャナイデス。エゲレス人デス。」
あ、エゲレス人なのか。
って、耳いいなおめぇ。ここからそこまで2丈（約6m）あるぜ。
今あたしはボソッと独り言を言ったのによぉ、エゲレス人には聞こえたってことか？　すげぇなぁ。
「私、エゲレス人ジャナイデス。」
は？　だって、今おめぇ、自分でエゲレス人っつたじゃねぇか。
すると、エゲレス人はつかつかとあたしに歩み寄ってきた。
「私、マーリンデス。アナタハ、誰デスカ？」
「あたしは、上条　舞子ってんだ。よろしくな！」
あたしがそういうと、マーリンは手を出してきた。
は？　意味わかんねぇ。手がどうしたってんだ、痛ぇのか？
「違イマス。コレハ、握手デス。未来ノ日本デハ、皆握手シマス。」
はぁ？　まさかおめぇ、未来がわかんのか？
「ソウデス。デモ、コレハ秘密デス。コレ、皆ニ言ッタラ、私日本ニ居ラレナクナッチャイマス。」
わかった。誰にも言わねぇ。
でも、あたしおめぇに占って欲しいことがあるんだ。
「今、日本は危ないんだ。この前は、ペリーが大砲ぶっ放して……。」
マーリンがあたしの話を遮（さえぎ）って言った。
「私、ソウイウコトハ、予知シマセン。」
「なんで……、なんでなんだよ！　本当に知りたいんだ！　戦は良くないんだ。もし戦が始まったら、田畑が踏みつぶされる。農民に

とって、田畑は命なんだ。田畑がなくなったら、作物が獲れなくなっちまう。そしたら、農民は終わりなんだ！　そんなことにはなんないで欲しい！　だから、予知してくれ！　頼む！！」

あたしは、土下座した。頭を地面にこすりつけた。

「ソノ気持チハヨクワカリマス。デモ、私ハデキマセン。ソンナコトシタラ、人生狂ッチャウシ、楽シクモ辛クモアリマセン。人間、イロンナコトヲ経験シナクチャイケマセン。私ガ、ソレヲ踏ミ潰シタライケナインデス。第一、ソンナコトヲ、将軍ガ信ジルトデモオモイマスカ？」

あ、そだ……。いかん、あたしったら、感情的になっちまった。

「イインデス。私、舞子ガトテモ優シイコトガワカリマシタカラ。頭ヲ上ゲテクダサイ。ソウダ、コレカラ川ニ行キマセンカ？　私ガ、トッテモ優シイ人ニシカ話サナイト決メタ、スゴイ話ヲシマス。」

マーリンは微笑みながらあたしに手を差し伸べてくれた。

第1章　昔々のお話（後書き）

見にくいですよね～、マーリンの台詞。
これは、まだまだ片言だった日本語を表現したかった為にやったことなんですが、カタカナばっかで読みにく！　って思った人はたくさんいたと思います。
ですが、頑張って読んでください。

最近、真面目に話作ってばっかなんで、次回はギャグ要素を詰め込みたいと思います。
最近読者になった、友人H（男）には、「マジつまらん。」といわれてますがね・・・。

第2章　舞子、マーリンの正体を知る（前書き）

最近、更新してなかったですね。すいませ～んm（__）m
忘れてました～、テヘッ。
学「テヘッ、じゃねぇ！！　全く反省の色がみられないのは気のせいかな！？」
り「あ、学、久しぶり。」

第2章　舞子、マーリンの正体を知る

あたしとマーリンは、土手に来た。川がある。川の名前なんか知らない。

あたし達2人は、川べりに並んで座った。

周りに人気は無い。マーリンがあたしだけに話したいって言うからだ。

マーリンが口を開いた。

「私ガ生マレタ所ハ、マジカルワールドト言イマス。」

まじかるわーるど？　何だ、それ。まず何語だ？　日本語ではなさそうじゃねぇか。

「正解デス。コレハ、英語デ、エート、魔法世界ト言イマス。」

今、みょうに日本人っぽくなかったか？　「えーと」って、思いっ切り日本人じゃねぇか。

寺子屋の先生もそう言うんだ。前に、その先生が「わしのありがたい話」と題して、寺子屋の皆に体験談を話して聴かせたんだ。それが、「えーと」が多いったらありゃしねぇ。しかも、「あー」とか「えー」とかも言うんだよ。

それであたし、何回その類(たぐい)の事を言うか、数えてみたんだ。そうしたら、2刻（約1時間）しっかり話して、１０００回も言ったんだ。

あー、思い出したら笑えてきたなぁ。

「舞子、何笑ッテルンデスカ。マア、イイデス。ソノマジカルワールドデハ、魔法ヲ使エル事ガ普通デアリ、皆魔法ガ使エマス。何モカモガ、魔法デ解決出来マス。大体ハ。」

へー、すごいんだな。実感わかないけど。

「実感ワイテ下サイ、ト言ッテモ、ワカナイデショウネ。デモ、生マレタ時カラ上手ク魔法ガ使エル訳デハアリマセン。練習シナケレバ。魔法モ一日ニシテナラズ、デス。ソノ為ニ、魔法学校ガアリマ

ス。私ハ、魔法学校ノ生徒デス。今月ハ、実習期間モ兼ネテ、サイエンスワールドニ来マシタ。」

さいえんすわーるど？　また英語か？　って、英語って何だ？

「エ、サッキ、納得シテマセンデシタ？」

あー、さっきも言ってた様な気もしなくはない。

「気モシナクハナイッテ……。アヤフヤデスネ。英語ト言ウノハ、United States of America（アメリカの正式国名）、スナワチ、メリケン（当時、日本ではアメリカはメリケンと呼ばれていた）等デ使ワレテイル言葉デス。デ、分カリマシタカ？　マタ後デ、英語ッテ何？　発言サレテモ答エマセンヨ。ソレデ、サイエンスワールドト言ウノハ日本語ニ訳スト、科学世界デス。マダ日本ハ科学ハ発達シテイマセンガ、未来ノ日本ハ世界一ノ科学大国ニナリマス。ソノ内、世界デ1番サイエンスト言ウ言葉ガ合ウ国ニナリマスヨ。」

あ、もう大丈夫だから。どうぞ、話を続けて下せぇ。

「でもさ、実習って何やんだ？　もしや、呪いをかけるのか？　なら、いいの知ってるぞ。丑の刻参りってんだ。最近、巷で流行ってるんだ。特に女子に……。」

「ソウイウ事ジャアリマセン。人間ニ慣レルンデスヨ。ア、モシヤ、舞子、魔法大好キデスカ？　シカモ、呪イ系統ノ？」

ああ、ちょっと興味があるんだ。よく皆からは危ないって言われるけどな。

「危ナイデスネ。」

今ちょっとかぶせぎみに言ったな！？　しかも、魔法を使える奴が！！　そこは、「全然危ナクナイデスヨ。」とか言うだろ、普通！　何、普通に危ないって言っちゃってんの！？

「諸危ナイデスヨ。マジカルワールドデモ、黒魔法ト呼バレテイテ、禁ジラレテルンデス。黒魔法ヲ使ッタラ最後、破滅ノ道ヲ進ム事ニナリマス。」

破滅の道……。随分と重いな。

って待てよ、皆黒魔法使いまくりじゃねぇか！！　藁人形持って、五寸釘持って、カンカンカ～ン♪　って毎晩やっちゃってるぞ。って事は、皆破滅の道に……。

「カンカンカ～ン♪　ッテ、ソンナ黒魔法ハ軽クアリマセン。ムシロ、ゴンゴンゴ～ン♪　デス。デモ、大丈夫デス。ソレハ、マジカルワールドニ住ンデイル者ト、サイエンスワールドニ住ンデイテモ魔法ヲ修行シテイルカ、習得シタ者ニ限リマス。」

その「ゴンゴンゴ～ン♪」って何の音だ？　まさか……。

「ソノ、マサカデス。モチロン、鈍器ノ音デスヨ。ソウジャナカッタラ、何ナンデスカ。包丁ヲ研（と）イデイル音デスカ？　ソレトモ、銃声デスカ？」

おいおい、随分と黒いな。あたしはいいけど、そこらへんの女子（おなご）に言ったら、「キャーーーーー！！！！！」って言って、ものすごい勢いで走り去られて、嫌われるぞ。

なんか、暗くなってきたな。

あれ、もう陽が落ちてきやがった。

「それで、もう話は終わったのか？」

「エエ、相当脱線シマシタガネ。コレデ終ワリナンデスガ、相談ガアリマス。」

おう、何だ。

「私、今日サイエンスワールドニ来タバカリナンデス。ソレデ、マダ寝泊マリスル場所ヲ確保シテイナインデス。舞子ノ家ニ、泊メテモラエマセンカ？」

ああ、そんな事か。全然大丈夫だ。

「じゃあ、家に帰るとするか。さあ、マーリン、行くぞ。」

「ハイ、アリガトウゴザイマス。」

帰り道に見た暮れかけの夕日は、今までで1番綺麗だった。まるで、今のあたしのマーリンに信じてもらえてうれしい気持ちを、投影しているみたいだった。

第2章　舞子、マーリンの正体を知る（後書き）

久しぶりです、りんかです。

後半、脱線しまくりでしたね～。

途中、黒魔法の事を話題にしましたが、これでも黒魔女さんが通る！！シリーズのファンですからね！　決して、心からこんな事は思ってませんから！

丑の刻参りの事も出してみたんですが、皆さんお気づきでしょうか。前に学が丑の刻参りについて熱く語っていたのとリンクさせてみました。

舞子もオカルト好きなんですよ。

ここで設定裏話。

上条家の血をひいている人の意外なる共通点を。

学「何だ、上条の血をひいてるって事だけじゃないのか。」

そんな生ぬるい事ではありません。

それは、名前は「ま」で始まるか、勉強系の名前なんです。

思い出して下さい。上条　学、上条　舞子、上条　真（まこと）、上条　勉・・・。

ほら。

学「じいちゃんだけ、勉だぞ。共通点なのか、これは？」

これを、私は「まの呪い」と呼んでいます。

学「じいちゃんは～？」

そして、最後。グロいですね。１８禁とかにした方がいいですかね？

でも、ストレートに表現してないんで、たぶん大丈夫ですよね？

ではまた今度〜。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6816t/

魔法学校優等生

2011年12月11日19時39分発行